

# 模擬授業研究会の斉藤メモ(2019年11月21日)

授業者：〇〇

範囲：裁判員制度

## 主な感想・代案

- 導入に驚きがないような感じがしました。主発問のインパクトの問題と言えるかもしれませんが、これはそれぞれの授業観によって考え方は違うと思うかもしれませんが、導入で何らかの疑問を持たせること自体は大切なように思います。学習課題や主発問を考えるべきという正当性を強化しておく必要はあるかなと思います。
- ⇒ 私であれば、他の専門職（医者、弁護士など）との比較を導入で出して、素人が口出していいことなのか？という点を生徒に疑問を持たせるような場面を作るかもしれません。素人が口出しするとむしろ混乱が起こったり、判決が不当なものになるのではないかな？そんなことを少し煽った上で、岸君が準備している主発問を提示する。こういう方法もあるかなと思います。
- 最後に「心構え」がくる点について、これがこの授業の結論で良いのか違和感を持ちました。導入の流れや主発問とまとめが一致していないように感じるという意味だけでなく、生徒に考えさせることを重視する授業（いわゆる思考判断表現）において、最後の場面で道徳的なタッチで終わることにならないかというのが私の意見です。ただ、一方で、既存の制度を前提として考えれば、心構えを教えるべきという主張もありうるので、論争的な点かなと思います。
- ⇒ この点に関しては、もう少し、社会的な視点（社会全体のスケールから見る視点）と個人的な視点（自分の好き嫌いや損得から見る視点）を交差させるようなまとめ方にしてはどうでしょうか？例えば、社会制度に対して、私たちが「社会全体から見ればその方が良いけれど、個人的には嫌いだ」という見解を持つ場合はあり得ます。結論の手前で、「裁判員制度を導入することは社会全体にとってよいことか？」「あなた個人にとって、裁判員制度の導入は良いこと？悪いこと？」の二つを合わせて聞く。そしてまとめの振り返りで「裁判員制度とどのように向き合っていくべきか？率直な気持ちを述べてみよう」くらいにしてみる。こんな感じがありうるかなと思いました。
- 現状では、展開で「より良い制度」を考えるためのヒントが不十分なように思います。導入で裁判員制度の説明が短い点とも関係があるかもしれませんが、良い制度を提案するには、ある程度既存の制度について知っていないといけないのですが、その情報が配布資料では不足気味な印象があります。
- ⇒ 他国の司法制度や賛否両論をもっと詳しく載せるのも一案ですが、思い切って、政策改善案ランキングの表のピースを教師側が用意し（二個くらいは自由記述にしてもよいかも）、それを生徒が順位付けするという方法もありうるかなと思いました。

## 【コラム】理論と実践の接点

特定の学習内容や社会問題を学ぶ際に、それが重要であるかどうか。それを教育者は皆が考えます。最近だと、「レリバンス」という言葉が使われるようになり、ある問題が生徒にとって切実だったり重要であるかどうかを「レリバンスがある」「レリバンスがない」といったりします。このレリバンスに関して、米国の教育学者ブルーナーは、「社会的レリバンス」と「個人的レリバンス」を分けて説明しました。個人にとっては重要な問題も、社会的に見ればあまり重要でないこともあるし、その逆もある。この区分はそれを示しているのですが、両方の視点に偏りすぎないように、「社会的」「個人的」の両方の視点を意識していくことは重要になると思います。

【参考文献】田中伸(2017)「社会的レリバンスの構築を目指した授業研究方法略」『社会科教育論叢』50集, pp.81-90.